

『東北ロマン主義研究』第1号 2014年
東北ロマン主義文学・文化研究会
(抜刷)

Tohoku Romantic Studies No. 1 2014
Tohoku Association for Romantic Studies

ディケンズ・メイヒュー・児童労働

中村 隆

NAKAMURA Takashi

ディケンズ・メイヒュー・児童労働

中村 隆

序

本稿は、ディケンズ (Charles Dickens) とメイヒュー (Henry Mayhew) がともにかかわった児童労働を主題とする¹。ディケンズはフィクションにおいて、他方、メイヒューはノンフィクションにおいて多くの下層の子供たちを描き出している。しかし、貧困の中で働く子供という主題の近接性にもかかわらず、両者を本格的に比較検討した先行研究は存外になく、また、児童労働に関するものはほとんど見あたらない²。ディケンズとメイヒューの主題の類似性に関して、ローゼンバーグ (John D. Rosenberg) は次のように述べている。「メイヒューの事例研究からディケンズの作品へと目を移すためには、同じ通りの端から端へと渡るだけでよい。視点が変わるだけで、風景が変わるわけではない」(Rosenberg vii)。確かに、ディケンズとメイヒューは「同じ通り」に佇んで、少し異なる視点から何か同じものを見ていた。その一例が苦役のような労働に従事する子供たちである。

メイヒューはさておくとしても、ディケンズにおける子供に関する先行研究は肥沃である。この分野の先駆けとなったのは、コヴニー (Peter Coveney) の『子供のイメージ』(*The Image of Childhood*, 1967) である³。コヴニーは、ロマン派詩人たちが捉えた繊細な感受性を付与された子供たちを「ロマンティック・チャイルド」と名づけた。コヴニーはディケンズの子供の中に、ブレイク (William Blake) 流の、そして、ワーズワス (William Wordsworth) 風のロマンティック・チャイルドの響きを聞き取るが、一方で、本質的な違いとして、子供にセンチメンタルな「死」が新たに付加されていることに注目している。たとえば、『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1848) のポール (Paul) という死の運命に導かれる子供がその典型である (Coveney 139-40)⁴。

ここで、子供に関するある思想対立を想起しておく。1つは、18世紀後半に、ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の『エミール』(*Émile*, 1762) を源流として広く浸透した「子供の根源的無垢」の思想であり、この具現がロマンティック・

チャイルドである (Coveney 42)。他方、子供も原罪を免れないというカルヴァン主義的認識があり、これは 16 世紀の宗教改革からロマン派の時代を越え、19 世紀半ばまで連続と続く (Wilson 214-16, Newsom 93)。注意すべきことは、ディケンズが描いた子供たちは無垢の子であることもあれば、墮落し、穢れた世界に住まう原罪の子の場合もありえることである。ディケンズの子供に見られる矛盾するヤヌスの性質を指して、アンドルーズ (Malcolm Andrews) は、grown-up child すなわち「大人のような子供」あるいは「子供のような大人」と呼称した (Andrews 71-181)。類似した文脈の中で、マルコヴィッチ (Amberyl Malkovich) は、ディケンズの子供たちを、無垢と原罪 (あるいは経験) を併せ持つという意味で「中途半端な子供」 ('imperfect child') と名づけている (Malkovich 1-140)。

第 1 節 オリヴァーの商品価値

本論では、ディケンズとメイヒューにおける児童労働を議論するにあたり、無垢と原罪、ロマンティック・チャイルド、大人のような子供、子供のような大人、中途半端な子供、等々の目に見えにくい概念とは異なる、より即物的で目に見える基準点を設定する。それは、「児童労働と貨幣」という視座である。

慧眼なコヴニーは、19 世紀の子供がしばしば労働と結びつけられていることに着目し、炭坑などで児童労働を強いられた子供たちを「産業に従事する英国の子供」と呼んでいる (Coveney 94)。労働には対価がつきものである。児童労働も同様であり、本節では、主として『オリヴァー・トウィスト』 (*Oliver Twist*, 1839、以下『オリヴァー』) をとり上げ、そこでの児童労働と貨幣の関係を確認することから始める。

丁稚をしていた葬儀屋の元を飛び出し、ロンドンに出てきたオリヴァーは、スリや強盗などの「犯罪という仕事」に巻き込まれる。スリの子供たちの元締めであるフェイギン (Fagin) が、オリヴァーに遊びの中でスリを仕込む場面は「児童労働と貨幣」の関係性を明らかにする。

Oliver held up the bottom of the pocket with one hand, as he had seen the Dodger hold it, and drew the handkerchief lightly out of it with the other.

'Is it gone?' cried the Jew.

'Here it is, sir,' said Oliver, showing it in his hand.

‘You’re a clever boy, my dear,’ said the playful old gentleman, patting Oliver on the head approvingly. ‘I never saw a sharper lad. Here’s a shilling for you....’

(ch. 9, 71)

オリヴァーはドジャーのやり方を真似て、一方の手でポケットの底を持ち上げ、もう一方の手でポケットからすっとハンカチを抜き取った。

「もうなくなったのかい？」ユダヤ人はそう叫んだ。

「はい、ここにあります」オリヴァーは手の中のハンカチを見せて答えた。

「お前さんはかしこいぞ」おどけた調子の老紳士はそういって、オリヴァーの頭をやさしく撫でた。「これほど早業の子もそうはいない。さあ、お駄賃を上げよう、1 シリングだ。」⁵

オリヴァーはこうしてスリの徒弟修行という児童労働をすることによって、1 シリングという貨幣を手にする。1824 年頃の靴墨工場での体験を回想するディケンズの言葉によると、一塊のパンは1 ペニーで、食堂で一皿の牛肉料理を食べると4 ペンスだった⁶。1 シリングは、パンならば12 個、牛肉料理ならば3 皿分が食べられる勘定である。スリ見習いを始めたばかりのオリヴァーにとってはかなりの報酬といってよいだろう。いずれにしても、オリヴァーのように労働する子供の1つのメルクマールは、彼らは貨幣から逃げるできないということである。

ここで、物語の時間を少し巻き戻してみる。救貧院で「(お粥を) もう少しください」(ch. 2, 27) と申し出て、救貧院の怒りを買ったオリヴァーは「この子を引き取ってくれるなら、その方に5 ポンド差し上げます」という告知文とともに売りに出される。しかしこれは奇妙な売買形式である。オリヴァーは人身売買の対象であり、本来は「商品」なのだから、救貧院側がオリヴァーを売って、いくばくかを儲けてもよさそうなのに、オリヴァーという労働力をただで差し出す上に、5 ポンドの謝礼金さえも付けている⁷。これに目を付け、オリヴァーを引き取りたいと申し出たのが煙突掃除屋のギャムフィールド (Gamfield) だった。作中で「何人もの子供たちが煙突の中で窒息死してきた」(ch. 3, 31) と述べられているように、子供の細い身体が利用される煙突掃除という仕事は、残酷な児童労働である。次に見るのは、オリヴァーという商品をめぐってなされる皮肉な値段交渉である。

‘What’ll you give, gen’lmen? Come! Don’t be too hard on a poor man. What’ll you give?’

‘I should say, three pound ten was plenty,’ said Mr Limbkins.

‘Ten shillings too much,’ said the gentleman in the white waistcoat.

‘Come!’ said Gamfield; ‘say four pound, gen’lmen. Say four pound, and you’ve got rid on him for good and all. There!’

‘Three pound ten,’ repeated Mr Limbkins, firmly. (ch. 3, 32)

「で、いくらくれるってんで？貧乏な男をいじめないでくれよ。いくら貰えるって話なんです？」

「そうだな、3 ポンド 10 シリングもあげれば上等じゃないかね」リムキンズ氏はいった。

「その 10 シリングは余計だ」白チョッキの紳士は横槍をいれた。

「ちょっと待ってくれ」ギャムフィールドはいった。「せめて 4 ポンドはくれよ。お願いだ。4 ポンドであんたたちはあのガキとおさらばできるって寸法だ。さあ、もう一声！」

「3 ポンド 10 シリングだ」リムキンズ氏はきっぱりと同じ額を繰り返した。
(ch. 3, 32)

結局、ギャムフィールドの方が折れ、3 ポンド 10 シリングで交渉が妥結する。少なくとも、救貧院側から見ると、オリヴァーという労働力の商品の価値は、マイナス 3 ポンド 10 シリングだった。3 ポンド 10 シリングは、牛肉料理なら 210 皿分である。あるいは、ウッド (Anthony Wood) にしたがるなら、オリヴァーという厄介者を処分するために支払われた額は、当時の熟練工の週給とほぼ同じである⁸。

スリという児童労働が明確に貨幣を希求しているにもかかわらず、奇妙なことに、『オリヴァー』において、児童労働の対価がペンスという単位まで事細かに言及されることはあまりない。例外は、ドジャー (Dodger) が嗅ぎタバコ入れを掏った罪で捕まった時のことである。これに関して、マスター・ベイツ

(Master Bates) は、「せいぜい 2 ペンス半程度の嗅ぎタバコ入れで捕まった上に流刑になるなんて！」(ch. 43, 290) と慨嘆している。しかし、このタバコ入れは、警察に押収されており、そもそも、換金できていない。2 ペンス半という一見、精密な労働対価はあくまで推測にすぎず、貨幣はどこか曖昧なままで

ある。

第2節 フェイギンという資本家

児童労働を代弁する貨幣は、フェイギンにおいて、いっそう抽象的なものになる。フェイギンがかんぬきを掛けた戸口の奥に隠している小さな箱には、貨幣ではなく「宝石がちりばめられた壮麗な金時計」(ch. 9, 67)や「指輪、ブローチ、ブレスレット、その他の宝石類」(ch. 9, 67)が隠されている。フェイギンは夜中にそれらをこっそりと取り出しては、ためつすがめつ眺めて悦に入る。フェイギンの手中にあるこれらの宝物もまた児童労働の対価である。というのも、フェイギンは、子供のスリ集団を束ねるいわば「資本家」として、自分の弟子たちからピンハネしたものを懐に入れてからである。小さな箱の中の宝物は、資本家であるフェイギンが子供の労働者から搾取した「剰余価値」なのである⁹。このように、一瞬であれ、ドジャーらの児童労働が、国家によって管理される貨幣という現実から解放され、宝石の世界に放たれる時、私はふとブレイクの「煙突掃除の子供たち」(‘The Chimney-Sweeper,’ *Songs of Innocence*, 1789)を想起する。そこでは、煙突掃除で髪が汚れないために頭の毛を剃られたトム(Tom)の夢が語られる。

And by came angel who had a bright key,
 And he opened the coffins and set them [sweepers in coffins] all free.
 Then down a green plain, leaping, laughing they run,
 And wash in a river and shine in the sun.

.....
 And the angel told Tom if he'd be a good boy,
 He'd have God for his father and never want joy. (13-16, 19-20)

光る鍵を持った天使がやってきました。

天使は棺を開け、煙突掃除の子供たちを解き放ちました。

彼らは緑なす丘の上を大声で笑いながら跳ねるように駆け降りていきます。

川の水で体を洗い、太陽の光の中で輝くために。

..... (中略)

天使はトムにいいました。もしよい子でいるなら、

あなたは神という父と永遠の歓びをえることでしょう。

この一節に溢れるトムを救済する光のイメージは、フェイギンの手の中のまばゆい宝石の光を連想させる。トムは煙突掃除という典型的な児童労働に就き、親方から搾取される存在である。同様に、ドジャーやオリヴァーもフェイギンという親方から搾取される子供たちである。また、この詩が『オリヴァー』の児童労働と近接しているように見えるのは、未然に終わったとはいえ、オリヴァーが煙突掃除をやらされそうになったことを思い出させるからでもある。さらに、オリヴァーが、宝石を愛でるフェイギンを目撃したのは、トムと同様に、夢のヴィジョンの中であることも、ブレイクの詩とこの小説が、相似形を織りなす一因である。

このように、フェイギンを通して見る児童労働の剰余価値は、貨幣という枠を一足飛びに越え、宝石に変貌している。それにしても、『オリヴァー』において、ディケンズはなぜ児童労働の指標としての対価に厳密であることを避けたのだろうか。言い換えると、なぜ、ディケンズは貨幣の厳しい現実をぼかしたのだろうか。

これを考えるにあたって興味深いのは、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861) のピップ (Pip) もまた貨幣の厳しい現実から目を背ける人物として描かれていることである。『大いなる遺産』において、ピップと彼の友人のハーバート (Herbert) が借金の整理を試みる場面がある。ここでピップは、「164 ポンド 4 シリング 2 ペンス」(ch. 34, 211) という詳細な借金額をいったん想定した上で、「端数は捨てるんだ。200 ポンドと書くんだよ」(ch. 34, 211) と口走る¹⁰。

ピップにおけるこの貨幣の曖昧化の理由として考えてみるべきは、ディケンズ自身による屈辱に満ちた児童労働のトラウマだろう。父 (John Dickens) が破産し、債務者監獄に入る直前に、当時 12 才のディケンズは靴墨工場で働くことになる。靴墨工場での体験を「再創造」したのが『オリヴァー』であると述べるマーカス (Steven Marcus) は、ディケンズは終生、靴墨工場での体験に真正面から向かい合うことができなかったと指摘している (Marcus 369)。この小説で描かれるスリという児童労働の対価が詳細な数字として語られない理由は、かつて作者が身をもって体験した児童労働と結びつく賃金の記憶とあまりにも露骨に結びついてしまうからではないだろうか。

しかし、その一方で、フェイギンからスリを仕込まれた初日にオリヴァーが

貰う1シリングは、ディケンズの児童労働にも幸福な瞬間があったことを示唆する。フォスター (John Forster) は次のように書いている。「ディケンズは土曜の夜はご褒美の時間だったといっていました。ポケットに6シリングを入れ、店のショーウィンドウを眺め、これで何が買えるだろうと考えながら帰宅する時は本当に嬉しかったとのことです」(Forster I, 23)。オリヴァーがスリの見習いという児童労働の対価として得た1シリングは、ディケンズが靴墨工場でもらっていた日当分と符合する。むしろ、この貨幣にまつわる記憶は、瞬時に「苦菜」(「出エジプト記」12章)を口に含んだ時のように、作者に苦難の記憶をも呼び起こしたはずである。

第3節 メイヒューとスリの少年

次に、児童労働との関連でメイヒューの記述を見ることにする。『ロンドンの貧民』の統計資料などにあふれる膨大な数字に窺われる数字の愛好はメイヒューの記述法の大きな特色である。数字は貨幣を表す基準装置でもある。メイヒュー自身、破産の憂き目にあっており (Douglass-Fairhurst xviii)、彼もまた貨幣とは因縁の深い人物である。次に見るのはあるスリの少年の例である。

メイヒューがスリをなりわいとするこの少年にインタビューした時、少年は15才だった。彼は10才の時、孤児となったのがきっかけで窃盗の道に入り、その後、ハンカチや財布をかすめ取るいっばしのスリ師になった。彼によれば、仕事がうまくいくのは、群衆や野次馬が集まる公開絞首刑や火事の時である。たとえば、マニング夫妻 (the Mannings) が処刑された日のことを彼は次のように回想している。「俺は絞首刑の時、4シリング6ペンスを稼いだ。2つのハンカチと2シリングが中に入っていた財布でね」(Mayhew I, 411)。また、少年はある火事を述懐し、「大火記念塔広場で、俺は5シリング7ペンスを稼いだ」と述べている。この5シリング7ペンスは「銀製品が3シリング、ハンカチが2シリング3ペンス、3組の手袋が4ペンス」(Mayhew I, 411)という具合にさらに3つのものに再分割される。

以上のことから、メイヒューによるスリという児童労働に関する記述については、少なくとも3つの特色が判明する。

- (1) 「数字の特定」：スリの労働対価が詳細に特定される。
- (2) 「品物の特定」：スリが狙っていた品物が具体的に特定される。

(3) 「場所の特定」：スリの現場が具体的に特定される。

「数字の特定」とは、スリという児童労働の対価がペンスという精密な最小単位まで語られるということである。メイヒューには、児童労働の対価に関して、貨幣の細部を記録しようとするいわば「貨幣克明主義」がある。これは、ディケンズにおける貨幣の端数をぼかす、あるいは、貨幣ではなく宝石という形を用いて貨幣の実態そのものを回避する「貨幣曖昧主義」とは好対照をなす。

「品物の特定」に関しては、メイヒューの場合も、ディケンズの場合も同様に具体的である。『ロンドンの貧民』では、掏られる品物として、ハンカチ、財布、銀製品、手袋などがあがっている。他方、『オリヴァー』では「嗅ぎタバコ入れ、札入れ、懐中時計の留め金と鎖、シャツの袖留めピン、ハンカチ、マグネツ入れ」(ch. 9, 70)などが例示される。ここで思い出しておきたいのは、フェイギンが戸口の奥に隠していた宝物の具体物が、壮麗な金時計、指輪、ブローチ、ブレスレットなどの宝石類だったことである。これらは、彼の弟子たちによって掏られた品物そのものと考えられる。つまり、かなり高額だったはずの「商品」は換金されていない¹¹。マルクスは、商品に内在する貨幣の交換価値を見ずに、商品の物質的・外的属性に捕らわれることを「物神礼拝」と呼んだが、商品を貨幣に交換することを拒むフェイギンは、ある種のフェティシストである¹²。

「場所の特定」とはスリの好んで出沒した場所が具体的に明示されることである。メイヒューがインタビューした少年によれば、群衆が集まり、かつ、その群衆の注意が何かある特定のものに逸れている場所がスリ師にとっては都合がよい。公開絞首刑の場がスリにうってつけの場所であることは、18世紀の Hogarth (William Hogarth) の『勤勉と怠惰』(*Industry and Idleness*, 1747) の第11図ですでによく知られているが、メイヒューのインフォーマントは、これに大火記念塔広場の火事を加えている。公開死刑であれ、火事であれ、人間が野次馬根性に駆られ、他人の不幸を楽しんでいる時、自身に災難が降りかかるというわけである。

では、場所に関して、『オリヴァー』の場合はどうだろうか。読者に与えられるスリの場所はどこか曖昧ではっきりしないことが多いが、特定できる現場が1つだけあり、それは、ブラウンロウ (Brownlow) が立ち読みをしている本屋(貸本屋)である。ここで、ドジャーとペイツは連携作業で、ブラウンロウか

らハンカチを掏りとる。オリヴァーは呆気にとられ、そこに立ち尽くしたために、警察署に連行される。スリという児童労働が子供たちの共同作業であることが語られる点は歴史的証言として興味深いが、なぜディケンズは野次馬の集まる雑踏ではなく、比較的静かな、つまり、スリに適していたとは思えない本屋を選んだのだろうか。ここで鍵となるのは、この本屋がブラウンロウとオリヴァーの出会いの場になることである。ブラウンロウは簡易裁判で無実だとわかったオリヴァーを自宅に引き取り、手厚い保護の手をオリヴァーに差し伸べている。紳士のブラウンロウとオリヴァーの出会いの場所が、公開死刑や火事などの卑俗な場所であってはいかにも都合が悪い。そこで、教養ある紳士にふさわしい本屋が選択されたと考えられる。

第4節 児童労働と教育

スリとは別の児童労働をメイヒューの中に探してみよう。当時、老女や子供が主に携わっていた「河どぶ浚い」(‘mud-lark’)という労働があった。これは、テムズ河の浅瀬の泥の中から、金目のものを探し出し、それを売って生計を立てる仕事である。それは次のように描写されている。

The coals that the mud-larks find, they sell to the poor people of the neighbourhood at 1*d.* per pot, holding about 14 lbs. The iron and bones and rope and copper nails which they collect, they sell at the rag-shops. They dispose of the iron at 5lbs. for 1*d.*, the bones at 3lb. a 1*d.*, rope a 1/2 *d.* per lb. wet, and 3/4*d.* per lb. dry, and copper nails at the rate of 4*d.* per lb. (Mayhew II, 155)

河どぶ浚いが見つけた石炭は近所の貧しい人たちに売られる。14ポンドの重さの石炭が入った1つの容器は1ペニーである。鉄くず、骨、縄、銅の釘はがらくた商に売られる。5ポンドの鉄は1ペニー、3ポンドの骨は1ペニー、1ポンドの縄は濡れていれば半ペニー、乾いていれば4分の3ペニー、1ポンドの銅の釘は4ペンスである。

時には、半身まで河に浸かってどぶを浚う貧民たちの中には年端もいかない多くの子供たちがいた。船から落ちた石炭は燃料になり、くず鉄は鉄の、縄は船の隙間を埋めるまいはだの、骨は陶器の、銅の釘は銅の、それぞれ原料としての価値があった。ここでも、「児童労働と貨幣」の連関は執拗といいいいほ

どに明確に示されている。さらに、先にあげたメイヒューが描くスリという児童労働の3つの特色、すなわち「数字の特定」、「品物の特定」、「場所の特定」もすべて満たされている。数字はそれぞれのものの精密な単位の重さと半ペニーにまで言及される価格で示され、品物は個別に特定される。場所については、テムズ河沿岸の具体的な地名がいくつかあげられている¹³。

河どぶ浚いをする子供たちの中でメイヒューが特に注目したのは、初対面の翌日、わざわざ自宅にまで招いてインタビューした J.C. というイニシャルで呼ばれる少年である。長いモノログを通して、彼の犯罪歴が赤裸々に語られた後、メイヒューがある積極的な提案を J.C. にする。

I [Mayhew] was so struck with the boy's truthfulness of manner, that I asked him, *would*, he really lead a different life, if he saw a means of so doing? He assured me he would, and begged me earnestly to try him. (Mayhew II, 158)

私はその少年の誠実な態度に胸を打たれたので、彼に、もしできるなら、今とは違う人生を送りたくはないかい？と問いかけた。彼は、もちろんですといい、試してみてください、と熱心に頼むのだった。

「違う人生を送りたくはないかい？」という問いかけは、メイヒューにしては珍しい積極的な行動である。というのも、メイヒューは貧困の中で苦しむ子供たちの悲惨な実態を明るみに出しはするものの、淡々とした乾いたリアリズムによって、つまり、数字と品物と場所に関する膨大な事実を積み重ねることによって、児童労働を描写するのが常だからである。しばしば涙に掻き濡れるオリヴァーには興味はないとでもいいだけに¹⁴、同情やセンチメンタリズムを敢えて排する記述法を取ったメイヒューの意図は明白で、彼は空恐ろしい事実を通して、同時代人の注意を喚起しようとしたのである。メイヒューは、ドキュメンタリーで語られる事実の重さを知っていたというべきだろう。実際、メイヒューの連載が契機となって、様々な募金活動や救援活動が起こったことが知られている¹⁵。J.C. によほど興味を持ったのか、メイヒューは自らある行動を起こすことになる。

I [Mayhew] mentioned the fact to a literary friend, who interested himself in the boy's welfare; and eventually succeeded in procuring him [J. C.] a situation at an

eminent printer's. (Mayhew II, 158)

私は知り合いの文学者にこの事実を話した。彼が J.C.の行く末に興味を示したために、J.C.にある有名な出版社での職を得させることができた。

こうして、メイヒューの友人の口利きによって、J.C.は、ブラッドベリー&エヴァンズ社 (Bradbury & Evans) での仕事を得ている。さらに、J.C.は、そこでの仕事が認められ、ある新聞社に職を得ることになる。それは、週給にして9シリングを得るものだった (Mayhew II, 158)。

J.C.はインタビューを受けた時14才だったが、その9年前に石炭引き揚げ人夫をしていた父を失っている。寡婦となった彼の母は、八百屋で生計を立て、J.C.が9才になると、週に1ペニーの学費を払って、学校に送った。彼はそこで1年間学ぶことができたが、ジャガイモ飢饉のために家業の八百屋が傾き、そのため、J.C.は学校を辞め、河どぶ浚いという仕事に就くことになった (Mayhew II, 157)。メイヒューは「極貧の中で育った子供が泥棒になってしまうのは、社会が正直に生きることを禁じているからだ」と述べ (Mayhew II, 158)、ヴィクトリア朝の社会に蔓延する貧困が犯罪を引き起こすことを指摘している。メイヒューの念頭にあったもう1つの社会悪が、無学文盲、すなわち「教育の欠如」だったはずである。事実、メイヒューは下層民について「この階層の大多数は無知であり、教養のかけらもない」 (Mayhew II, 156) と嘆いている。

貧しい子供たちを無償で教育するために設立されたのが「貧民学校」 ('ragged school') だった。パターソンによれば、19の学校が加盟する「貧民学校組合」が1844年に設立され、1861年には貧民学校の総生徒数は2万6千人ほどだったという (Paterson 210-11)。J.C.が登場する『ロンドンの貧民』の第2巻は1851年から翌年にかけて出版されたものであり、これは貧民学校の興隆の時期とほぼ合致する。後述するように、J.C.も貧民学校に通っている。だが、そこでの教育は彼を救い出すたぐいのものではなかった。

いずれにしても、ヴィクトリア朝中期において、最貧層の子供たちを救済する方策として教育の可能性が広く認識されていたことはほぼ疑いない¹⁶。では、当時の貧民学校はいかなる教育を保証したのだろうか。ディケンズが主宰した『ハウスホールド・ナラティヴ』 (*Household Narrative of Current Events*) という月刊雑誌に貧民学校に関する具体的な記述がある。

The *Utility of Ragged Schools* has been fully developed at their several anniversary festivals this month. The eighth annual meeting of the supporters of the Field Lane Ragged School took place on the 1st inst. The Report . . . stated that 320 children had been received into the school during the last twelve-months; that the girls were well instructed in knitting and needlework, and that the boys would shortly be able to furnish shoes to the school at the cost price of the material. ¹⁷

貧民学校の有益さは今月に数回開かれた記念行事で説明し尽くされている。フィールド・レイン貧民学校の支援者による8周年の記念行事は今月の1日に開かれた。「報告」によると、この1年でこの学校に通った生徒数は320名である。女の子は編み物と針仕事を習い、男の子は短期間で靴を作れるようになる。靴の材料費は学校持ちである。

これは、1850年の4月27日付けの記事であり、メイヒューが『ロンドンの貧民』の元になった一連の記事を連載していた時期と重なる。女の子は編み物と針仕事を、一方、男の子は靴の製造を習っているのは、貧民学校は「生きていくための技術」を施すことを教育理念としていたからである¹⁸。『ハウスホールド・ナラティヴ』の記事では、「貧民学校の有益さ」が強調されている。しかし、貧民学校が実学重視の効率的なシステムであったことは否定できないとしても、それほどバラ色の改革だったのかについてはなお疑問が残る。というのも、J.C.のモノローグが貧民学校の理念を粉々に砕いてしまうからである。J.C.は、河どぶ浚いの児童労働の仲間たちから誘われて、貧民学校に通うことになる。ところが、この貧民学校こそがJ.C.を悪の道に引きずり込んだ少年ギャングたちの温床だった。J.C.は次のように語っている。「校門があくのを待っている間に、俺たちは学校が引いたら、どこに泥棒に入るか計画を練ったもんです」(Mayhew II, 158)。またJ.C.によればウォッピング(Wapping)という地区にあった彼の貧民学校には4、50人の少年がいたが「ほとんど全員が泥棒」だった(Mayhew II, 158)。皮肉な見方をすれば、貧民学校は「悪の実学」を醸成する機関だったことになる。『ハウスホールド・ナラティヴ』の記事は、フィールド・レイン貧民学校以外でも、至る所で同種の学校の記念行事が華々しく行われていることを伝えている。つまり、貧民学校の「善」の機能がおおらかに語られている。これが教育改革を主導した中産階級側の公式見解である。ディケンズが主宰し、確実に眼を通していただであろう雑誌の記事が、功罪の功のみを

語っている¹⁹。他方、貧民学校の影の部分、すなわち、裏側に潜む最下層の子供たちの真実を白日の下に晒すのが、メイヒューのルポルタージュの作法である。彼は貧民たちがそれぞれ抱える小さな物語を細大漏らさず聞き取り、それを紙媒体に転写することを自己の至上命題としたのである。

* 本稿は2013年7月20日に開催された「第2回東北ロマン主義文学・文化研究会」（於東北大学）のシンポジウム「都会・田舎・子供」での稿者の発表に加筆修正したものである。

注

- 1 英米の人名、書名、登場人物名、等の固有名詞については、初出に限り、原文をカッコ内に表記し、以降は日本語表記とした。
- 2 メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（*London Labour and the London Poor*、以下『ロンドンの貧民』）の抜粋版を編集・出版したダグラス＝フェアハースト（Douglas-Fairhurst）によると、ディケンズとメイヒューの比較研究は、サックスミス（Harvey Sucksmith）とネルソン（Harland Nelson）によるものくらいしかない（Douglas-Fairhurst xlvii-xlviii）。そして、この2点の論考は児童労働とも子供とも関連がない（Sucksmith 345-49, Nelson 207-22）。ダグラス＝フェアハーストが言及していないディケンズとメイヒューの比較研究として、ハーバート（Christopher Herbert）が『リトル・ドリット』（*Little Dorrit*, 1857）と『ロンドンの貧民』を比較検討した論考がある（Herbert 185-213）。
- 3 1967年版は改訂版で、元々は *Poor Monkey* と題され、1957年に出版された。
- 4 ボールの死に象徴される子供の死の場面は同時代人から大量の涙を搾り取ったことが知られている。ラーナー（Laurence Lemer）は、「涙」が公共の場、とりわけ、劇場で好まれる要素だったと述べ、ディケンズにおけるセンチメンタルな涙は演劇的空間の産物であると指摘している（Lemer 82-117）。
- 5 和訳は特に断りのない限り、稿者によるものである。
- 6 12才で靴墨工場で働いていた時、ディケンズは一人で夕食をとることが多かったが、食堂で4ペンスの牛肉料理を食べて、ウェイターに半ペニーのチップを払う大人びた振る舞いをしたこともあった（Forster I, 23）。
- 7 もっとも、「食い扶持」が不要になるので、礼金をつけて厄介払いしても、救貧院側にとって割に合う話だったともいえる。実際、パターソン（Michael Paterson）は、見習い奉公を取ってくれた雇い主には救貧院から一人あたり5ポンドが支給される慣習があったことを指摘している（Paterson 180）。オリヴァーについて、救貧院側がその5ポンドを出し渋っていることから、このような礼金システムはあくまでも建前だったこともわかる。
- 8 ウッドは19世紀中葉の高度な熟練工の週給は3ポンドだったと述べている（Wood 184）。当時の貨幣価値の推定に関しては、ウッド以外に、中村 155-56 を参照。
- 9 剰余価値については、マルクス（Karl Marx）の『資本論』（三）9-48を参照。
- 10 金銭の細部をごまかすこと自体が金銭至上主義の皮肉な裏返しともいえる。ピップは棚ぼた式に転がり込んだ富を享受した人間でもある。スミス（Grahame Smith）は「ピップは、資本主義社

会で人間は金に眼がくらんでしまうことを示す反・英雄だ」と述べている (Smith 197-98)。

¹¹ 懐中時計はスリの狙う品物であるが、指輪、ブローチなどの宝飾品は肌身離さず身につけられるものであり、拘るのは困難だったはずである。拘られるものとして、宝飾品を出しているのは実態に即していたとは思えないが、作者は、フェイギンの宝箱の中にあるのが貨幣や紙幣では魅力に乏しいと考えたのだろう。フェイギンの財宝として、宝飾品という光る「商品」こそがふさわしかったのである。

¹² 商品と物神礼拝の関係については、マルクスの『資本論』(一) 129-51 を参照。

¹³ 「ジェームズ王の階段」(King James' Stair)、「ヴォクスール橋」(Vauxhall-bridge)、「ウリッジ」(Woolwich) などの地名があがっている (Mayhew II, 155-57)。

¹⁴ オリヴァーの付属物は涙であるといっても過言でないほどオリヴァーはしばしば泣く。たとえば、「誰からも愛されない役立たずの孤児め」とバンプル (Bumble) がなじった時、オリヴァーは激しく泣きじゃくり、驚いたバンプルが少しだけ優しく諭す場面がある (ch. 3, 33)。ディケンズとメイヒューの明確な相違点として、センチメンタリズムがあるが、この主題に関しては、稿を改めて考察したい。この分野では、コリンズ (Philip Collins)、カプラン (Fred Kaplan)、ラーナー、パートン (Valerie Purton) らの先行研究がある。

¹⁵ たとえば、無職の女性を植民地に送る計画には 17,000 ポンドもの寄付が寄せられ、1852 年までに 700 名の女性たちがお針子として、植民地へ送られた。『モーニング・クロニクル』誌 (*Morning Chronicle*) の事務所宛てに直接募金が送られることもあった。Douglas-Fairhurst xxv-xxvi 参照。

¹⁶ Paterson 210-11 参照。玉井史絵氏は、『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) 誌上の多数の教育関連の記事を参照し、労働者への教育の必要性を訴えたキー＝シャトルワース (James Key-Shuttleworth) の教育改革に注目している (玉井 168-75)。初等教育の改革は全国的な広がりをもたせ、イギリス全土で初等教育を受ける比率が 1818 年には 17 人につき 1 人だったものが、1850 年には 8 人につき 1 人にまで改善されている。Perkin 295 参照。

¹⁷ 『ハウスホールド・ナラティブ』は、週刊総合雑誌『ハウスホールド・ワーズ』の姉妹誌 ('supplement') である。前者の概要についてはドロー (John Drew) の以下の Web 上の記述を参照。

<http://www.djo.org.uk/indexes/journals/household-words-narrative.html>. 引用部の 1850 年 4 月 27 日付の記事については以下の Web 上の記事を参照。

<http://www.djo.org.uk/household-narrative-of-current-events/year-1850/page-113.html>.

¹⁸ 貧民学校のカリキュラムはまず読み書きがあり、歴史や地理が教えられることもあった。学校での男子の職業訓練は靴の製造の他に仕立屋もあった。Paterson 231-32 参照。

¹⁹ 小池滋氏は『ハウスホールド・ワーズ』について、ディケンズは「すべての原稿を読んで」と述べている (小池 2)。姉妹雑誌である『ハウスホールド・ナラティブ』も 'Conducted by Charles Dickens' と銘打たれており、すべての原稿がディケンズに読まれていたはずである。

引用文献

- Andrews, Malcolm. *Dickens and the Grown-up Child*. Iowa: U of Iowa P, 1994.
Collins, Philip. *From Manly Tear to Stiff Upper Lip: The Victorians and Pathos*. Wellington: Victoria UP, 1974.

- Coveney, Peter. *The Image of Childhood*. Harmondsworth: Penguin, 1967.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Ed. Fred Kaplan. New York: Norton, 1993.
- . *Dombey and Son*. Ed. Valerie Purton. London: Dent, 1997.
- . *Great Expectations*. Ed. Edgar Rosenberg. New York: Norton, 1999.
- Douglas-Fairhurst, Robert. 'Introduction'. Ed. Robert Douglas-Fairhurst. Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor: A Selected Edition*. Oxford: Oxford UP, 2010. xiii-xliii.
- Drew, John. *Dickens Journals Online*. <http://www.djo.org.uk>.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. I. London: Dent, 1966.
- Herbert, Christopher. 'Filthy Lucre: Victorian Ideas of Money'. *Victorian Studies* 44 (2002) : 185-213.
- Kaplan, Fred. *Sacred Tears*. Princeton: Princeton UP, 1987.
- Lerner, Laurence. *Angels and Absences: Child Deaths in the Nineteenth Century*. Nashville & London: Vanderbilt UP, 1997.
- Malkovich, Amberlyl. *Charles Dickens and the Victorian Child: Romanticizing and Socializing the Imperfect Child*. New York: Routledge, 2013.
- Marcus, Steven. *Dickens from Pickwick to Dombey*. New York: Simon and Schuster, 1965.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. Vols. I & II. Ed. John D. Rosenberg. New York: Dover, 1968.
- Mason, Michael. Ed. *William Blake*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Nelson, Harland. 'Dickens's *Our Mutual Friend* and Henry Mayhew's *London Labour and the London Poor*'. *Nineteenth-Century Fiction* 20 (1965) : 207-22.
- Newsom, Robert. 'Fictions of Childhood'. *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Ed. John Jordan. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 92-105.
- Paterson, Michael. *Voices from Dickens' London*. Cincinnati: David & Charles, 2006.
- Perkin, Harold. *Origins of Modern English Society*. London: Routledge, 1969.
- Purton, Valerie. *Dickens and the Sentimental Tradition*. London: Athens P, 2012.
- Rosenberg, John D. 'Introduction'. Ed. John Rosenberg. Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor*. Vol. I. New York: Dover, 1968. v-ix.
- Smith, Grahame. *Dickens, Money, and Society*. Berkeley and Los Angeles: U of California P, 1998.

- Sucksmith, Harvey. 'Dickens and Mayhew: A Further Note'. *Nineteenth-Century Fiction* 24 (1969) : 345-49.
- Wilson, Angus. 'Dickens on Children and Childhood'. Ed. Michael Slater, *Dickens 1970*. London: Chapman & Hall, 1970. 195-227.
- Wood, Anthony. *Nineteenth Century Britain 1815-1914*. Second Ed. Harlow: Longman, 1982.
- 小池滋. 「*Household Words* 解説」. 『*Household Words*』. 東京: 本の友社、1989. 別冊 1-4.
- 玉井史絵. 「『ハード・タイムズ』: 教育の(暴)力」. 松岡光治編. 『ディケンズ文学における暴力とその変奏』. 大阪: 大阪教育図書、2012. 165-80.
- 中村隆. 「『荒涼館』: 国家・警察・刑事・暴力装置」. 松岡光治編. 『ディケンズ文学における暴力とその変奏』. 大阪: 大阪教育図書、2012. 149-64.
- マルクス、カール. 『資本論』(一) & (三). 訳. 向坂逸郎. 東京: 岩波書店、1969.

(山形大学教授)